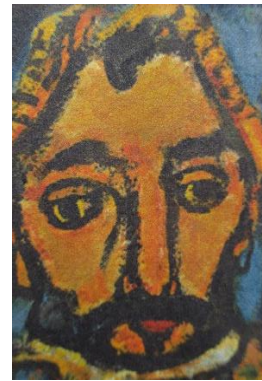
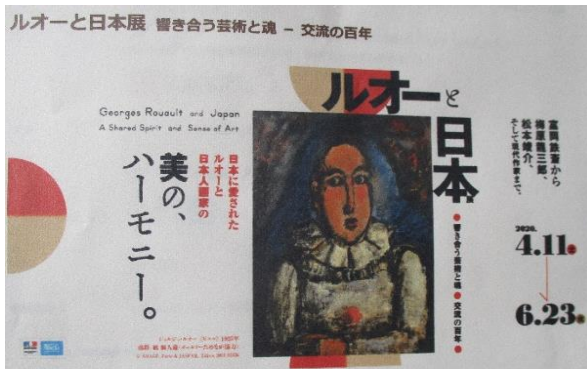


ルオーと日本展 響き合う芸術と魂 —交流の100年

パナソニック汐留美術館 2020.05.09～06.23 (開催期間短縮)



20世紀を代表するフランスの画家「ジョルジュ・ルオー」(1871～1958)の絵画は、約100年前に日本の画家「梅原龍三郎」がパリで作品に衝撃を受けて作品《裸婦》を購入して帰国したとされる。その後、画伯の作品は次々と日本に紹介され、“その力強い線や輝くような絵肌”は日本の洋画界に多大の影響を与えた。

一方、「ルオー」は、日本のコレクター「福島繁太郎」や日本画家らと親交を深め、日本との物語性豊かな接点に注目しつつ、近代洋画を代表する画家の作品を展覧し日本の洋画史に多大な影響を与えたとも伝えられている。

<本展の見どころ>

1. 日本ゆかりの「ルオー」作品が終結

《裸婦》(1908年): 日本に初めてもたらされた作品や《ピエロ》(1925年): コレクター「福島繁太郎」が雑誌を通して日本に紹介した作品など。

また、《日本の武士》(1928年頃)、《日本の版画に基づく習作》(1922年以降)などの来日作品や「ルオー」が日本の美術に関心を寄せていた作品の展出。

2. 「梅原龍三郎」「松本竣介」など日本近代洋画を代表する画家の作品。

「ルオー」と「日本画家」の作品を並置展示して、比較しながら「ルオー」が日本の洋画史に果たした役割を、作品を通して知ることができる貴重な機会。

3. 「白隠慧鶴」(江戸期の禅僧)、「富岡鉄斎」(明治・大正の文人画家)の画家、ルオーの後の世代の作家や現代作家の作品と「ルオー」作品との共演。

日本の書画や「舟越保武」「村上友晴」らの「ルオー」後の世代の作家、現代作家の作品を展示し、時代・地域・ジャンルを超える普遍性を紹介している。

終章 継承—普遍的なるもの

「ルオー」とは、時代・芸術ジャンル・表現技法も異なりながらも、祈るように制作をし、作品に彼方の光のような精神性を表現する日本の芸術家作品展示。